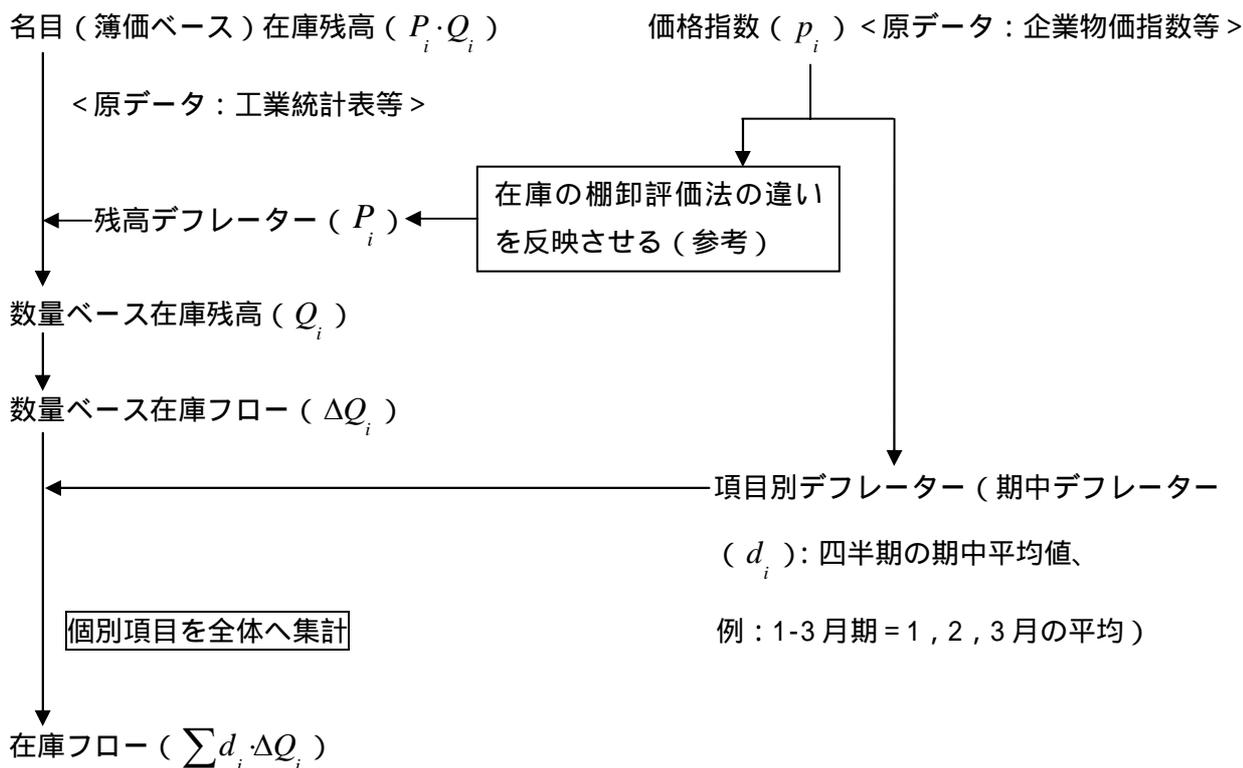


在庫フローの推計プロセスについて（四半期速報値のイメージ）

1. 名目（時価ベース）在庫フローの算出

個別項目の推計 項目別（ i 項目）：90 品目 × 4 形態別



2. 実質在庫フローの算出

(1) 固定基準方式

$$\text{在庫フロー} = \sum d_{i0} \cdot \Delta Q_i \quad (d_{i0} \text{ は基準年の期中デフレーター})$$

(2) 連鎖方式

フローはマイナスやゼロとなる可能性のあるため、残高を計算した後にフローに転換する

$$\text{在庫残高 } LV_t = LV_{t-1} \times \frac{\sum \bar{D}_{i,t-1} Q_{i,t}}{\sum \bar{D}_{i,t-1} Q_{i,t-1}}$$

$\bar{D}_{i,t}$ は項目 i の期末デフレーターの年平均値

$$\bar{D}_{i,t} = \frac{\sum D_{i,t}^k Q_{i,t}^k}{\sum Q_{i,t}^k} \quad \left(\begin{array}{l} \text{期末デフレーター } (D_i): \text{ 四半期の期末値} \\ \text{(例：3 月末 = 3 月と 4 月の平均)} \end{array} \right)$$

k は t 年の第 k 四半期

$$\text{在庫フロー } \Delta LV_t = LV_t - LV_{t-1}$$

(注) 在庫品の棚卸評価法の違いや在庫品評価調整の計算は実質化とは基本的には関係がない。

3. その他

$$\text{保有利得 (キャピタルゲイン・ロス)} = \sum (D_{i,t} \cdot Q_{i,t} - D_{i,t-1} \cdot Q_{i,t-1}) - \sum d_{i,t} \cdot \Delta Q_{i,t}$$

(参考) 棚卸評価法の違いを考慮した簿価から数量への変換についての基本的考え方

簿価ベースのデータは、異時点における複数の価格情報を含むため、各期毎の価格で評価する SNA 推計に用いることはできない。

そこで、産業別の棚卸評価法の違い(先入先出法、後入先出法等)を適切に反映させて、簿価を数量に変換する。

例 1) 先入先出法

先に流入したものが先に流出すると想定して、古い原価から費用に参入し、新しい原価は期末のストックに割りあてて将来の費用に繰り越す評価法

現行推計では、在庫回転率(年ベース)に応じた最近時の価格で評価されているとみなす。

回転率が 9 以上、在庫残高デフレーター = 当期末月デフレーター

回転率が 4 ~ 8、在庫残高デフレーター = 当期末中デフレーター

回転率が 3 以下、在庫残高デフレーター = 前期および当期の期中デフレーターの平均

$$\text{在庫回転率} = \text{在庫取得額} \div \text{期末在庫残高} = (\text{出荷} + \text{在庫純増}) \div \text{期末在庫残高}$$

例 2) 後入先出法

後から受け入れたものが先に払い出されると想定して、新しい原価から費用に算入し、古い原価を将来に繰り越す評価法

現行推計では、取得時から価格が変化していないとみなし、残高デフレーター = 100 としている。

< 産業別の棚卸評価法データ : 「企業財務データ」(日本政策投資銀行) >